

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第7回

宗麟は蹴鞠の名手

日本古来の伝統的な球技に蹴鞠けまりがあります。鞠庭まりぼと呼ばれる15メートル四方の広場の中で、鹿皮で作られた鞠を8人ないし6人で地面に落とさないようにできるだけ多くの回数、蹴り上げ続けます。サッカーのリフティングをチームで行うようなイメージです。

戦国大名は武芸のみでなく、学芸にも秀でる教養人であることが求められました。

宗麟の祖父にあたる大友氏第19代義長は、大友家の安泰を固めるための「条々じょうじょう」と呼ばれる家訓を残していますが、その中で歌道・蹴鞠を軽んじて狩りを専らとすることを禁じています。大友家では武芸のみでなく学芸をも重視し、蹴鞠にも深い関心を示していました。



当時の蹴鞠の様子

【国宝 上杉本洛中洛外図屏風(部分)
(米沢市上杉博物館蔵)】

宗麟は、15歳のときに蹴鞠を本格的に始めています。蹴鞠の装束しゅうきくは身分や技量によって決められており、飛鳥井家を中心とする蹴鞠道家の許可がなければ着用できませんでした。

宗麟の蹴鞠の腕前はかなりのものであったようで、30歳のときには室町將軍・足利義輝から特に技量の勝った者に与えられる「香之上かうのかみ」という装束の着用が許されています。また、宗麟は蹴鞠の名手を指す「上足じょうそく」とも呼ばれ、現在でいえば、さながら名ストライカーといったところでしょうか。